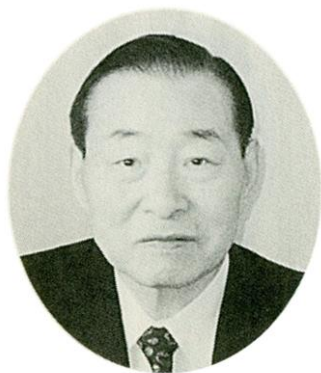


こんにちは！ 室長の工藤です。

5年ほど前、内野聖陽さんが主演の『海難1890』という日本・トルコの合作映画が公開され、私も観にいきました。この作品は日本とトルコとの関わりを示すふたつのストーリーで構成され、そのひとつが明治23年（1890）9月16日に紀伊大島沖で座礁・沈没した、オスマン帝国の船エルトゥールル号遭難事件です。遭難した乗組員たちの救出、介護などを不眠不休で行う島民たちの姿に胸が打たれました。

この事件の約1年前となる明治22年10月30日、車力村（現つがる市）の沖合でアメリカの帆船チェスボロー号が座礁・沈没し、乗組員23名のうち19名の命が失われました。この時も、エルトゥールル号とおなじく村の人々が救出作業等に力を尽くしたのです。さらに、青森県からの援助を得るために、若者ふたり（30代と40代男性とも）が県庁までの約64kmを走ったというエピソードや、乗組員を肌で温めて救助したという工藤はんさんのエピソードが残されています。



大高興さん

先日、つがる市の高山稲荷神社へ行く機会があったので、神社の手前にある「高山小公園」にも立ち寄りました。ここにはチェスボロー号遭難事件で犠牲となった19名の名前が刻まれた慰霊碑や、海を見渡せる展望台などがあります。そして、神社には工藤はんさんの胸像がありました。はんさんは宮司の御先祖なのだそうです。そして、胸像の左斜め上に、青森市の医師大高興さん（故人）が寄贈した、座礁したチェスボロー号と救助にあたる人々のようすを描いた絵が掲げられていました。

大高さんは昭和62年（1987）に『米国帆船チェスボロー号—救助の愛は海を照らす』を書いています。その「はじめに」によれば、この事件を「初めて世に出したのは筆者の実父故佐藤公知」で、昭和27年のことであったといっています。

また、寄贈の絵画は鱈ヶ沢町出身の画家神勝之助氏が描き、大高氏が昭和56年5月9日に寄贈したと同書に記してありました。この日は、「車力・青森間記念東奥駅伝競走」の第2回大会の前日に当たります。この大会は、県庁へ走ったふたりの若者に感動した大高氏が、「かの二人の若者をたたえ、遭難慰霊の意味から津軽路マラソンを提唱」したことに端を発し、4年以上の時を経て実現した、高山稲荷神社・青森県総合運動公園間61.5kmを9区間で走る駅伝大会です。

ただ、残念ながら第3回大会をもって幕を閉じました。



高山小公園

ちなみに、この日私は「奥津軽旅ラン体験ツアー」（青森県西北地域県民局が主催）に参加して61kmには到底及びませんが、津軽鉄道津軽中里駅をスタートして高山稲荷神社まで12.4kmを約1時間半かけてゆっくり走って移動しました。